

ブルーオーロラ サクソフォン・カルテット

1部

- サクソフォン四重奏曲 変ロ長調 Op.109より 第1楽章…グラスノフ
ペルガマスク組曲より「プレリュード」、「月の光」…………ドビュッシー
四季 Op.37より 7月「草刈り人の歌」、10月「秋の歌」
…………チャイコフスキイ(平野公崇編)
赤とんぼ……………山田耕筰(平野公崇編)
ミクロコスモス第6巻「ブルガリアのリズムによる6つの舞曲」より
…………バルトーク(平野公崇編)

2部

- 平均律クラヴィーア曲集第2巻より
第1番 プレリュード……………J.S.バッハ(平野公崇編)
主よ、人の望みの喜びよ……………J.S.バッハ(平野公崇編)
G線上のアリア……………J.S.バッハ(平野公崇編)
ゴルベルク変奏曲より第16変奏、第26変奏、即興、第19変奏、第7変奏、
第30変奏、アリア……………J.S.バッハ(平野公崇編)

秋

四季コンサート²⁰¹⁴

2014年10月19日(日)18:45開演
会場:浜松市教育文化会館
主催:浜松音楽友の会

プロフィール

サックス界の革命児、平野公崇が満を持して結成したサックス四重奏団。ソロ活動やオーケストラとの共演等を中心に演奏活動を行う中、同じ楽器同士の響きに次第に魅力を感じ始めた平野がカルテット結成を実現するにあたりメンバーとして集まつた。各世代の才能を結集した最強サックス四重奏団“ブルーオーロラ”。2011年秋に行ったCDリリース記念ツアーでは、CD収録作品に加え即興演奏や平野による新作も披露し、センセーショナルな成功を収めた。

平野公崇(ソプラノ・サクソフォン)

正統派クラシックから、即興、ジャズまで、幅広いフィールドを羅列無尽に駆け抜け抜ける実力派サクソフォニスト。東京藝術大学卒業後、パリ国立高等音楽院で学び、在学中にジャン=マリー・ロンデックス国際コンクールを制し、日本人として初の優勝者となる。東京藝術大学、エリザベト音楽大学、東邦音楽大学、洗足学園音楽大学非常勤講師。フランスのギャップ国際大学およびアカデミー・ハバネラ講師。

川中拓也(アルト・サクソフォン)

15歳よりサクソフォンを始める。第25回日本管打楽器コンクール第1位並びに特別大賞、文部科学大臣賞、東京都知事賞を受賞。優秀学生顕彰事業大賞受賞。東京藝術大学在学中アカンサス賞受賞。サクソフォンを平野公崇氏に、室内楽を中村均一、林田祐和の各氏に師事。都立芸術高校、東京藝術大学を経て、現在、洗足学園音楽大学非常勤講師。

西本 淳(テナー・サクソフォン)

1998年大阪音楽大学音楽学部器楽学科を首席で卒業。2000年同大学院音楽研究科管弦打研究室修上課程修了。08年ジャン=マリー・ロンデックス国際サクソフォンコンクールセミファイナリスト。各地でソリストとして活動するほか、大阪音楽大学、相愛大学、武庫川女子大学、相愛高等学校講師として後進の指導にも力を注いでいる。

大石将紀(バリトン・サクソフォン)

1999年東京藝術大学卒業。同年、同大学大学院修上課程に入学し、2001年に修了。その後、渡仏しパリ国立高等音楽院に入學。05年よりパリ国立高等音楽院第3課程室内楽科(サクソフォン四重奏)に進み07年に修了。10年にはNHKBSクラシック併楽部において特集されるなど幅広く活動している。東邦音楽大学・大学院および洗足学園音楽大学非常勤講師。

ブルーオーロラ
サクソフォン・カルテット



写真:ノザワヒロミチ

THE BLUE AURORA
SAXOPHONE QUARTET

●グラズノフ／サクソフォン四重奏曲 変ロ長調 Op.109より 第1楽章

サクソフォンは、ベルギーの楽器製作家アドルフ・サックスによって19世紀中頃に発明された。現在ではジャズやポップスでも多用されているが、サックスが目指したのは金管と木管をミックスした柔軟で美しい音色だった。グラズノフは19世紀末から20世紀前半に活躍したロシアの作曲家で指揮者。チャイコフスキーやロシア五人組を融合させた作風で、交響曲など多岐に亘る作品を多数遺した。サクソフォンについても協奏曲とこの四重奏曲などを作曲。本作は1932年に書かれ、ギャルド・レビューブリケーズ四重奏団に献呈されている。サクソフォン奏者にとって重要な室内楽曲である。

●ドビュッシー／ベルガマスク組曲より「プレリュード」、「月の光」

タイトルは、ドビュッシーが留学中に訪れた北イタリアのベルガモ地方、及びその地方の舞曲「ペルガマスカ」に由来している。1905年に出版されたこの組曲は、「プレリュード」、「メヌエット」、「月の光」、「バスビエ」の4曲で構成されており、「プレリュード」は即興曲風の美しい第1主題から、古風な雰囲気を持つ第2主題に推移する。広く知られる「月の光」は、水面がゆらゆらと輝いている様子を優美に描いており、ロマンティックで静謐な情景は神秘性さえも醸し出す。

●チャイコフスキイ(平野公審編) 四季 Op.37より7月「草刈り人の歌」、10月「秋の歌」

1875年にペテルブルクで創刊された音楽雑誌の目玉は、毎月チャイコフスキーのピアノ新作小品を1曲掲載していく企画であり、作曲家は折々の季節に合わせたロシアの詩を選んでその印象を作品に綴っていった。1月から12月までの各曲には標題が付けられ、各々は感傷的でメランコリックな抒情を紡いでいる。『草刈り人の歌』は民謡風の舞曲がゆったりと力強く展開し、『秋の歌』は切ないまでの哀愁が漂う。

●山田耕筰(平野公泰編) / 赤とんぼ

日本を代表する歌曲のひとつで日本の歌百選。詩人・三木露風は1921年に童謡集『真珠島』を出版、その中に収録された「赤とんぼ」に耕洋が曲を付けた。幼少時に両親が離婚し、姉やに負われて見上げた空、去っていった母への恋しさなど故郷の情を歌っている。

●パルトーク(平野公造編)／ミクロヨスモス第6巻「ブルガリアのリズムによる8つの舞曲」より

「ミクロコスモス」は、バルトークが1926年から1939年にかけて作曲した全6巻、153曲のピアノ練習曲集である。演奏時間が短く、多彩なキャラクターからミクロコスモス(小宇宙)と呼ばれる。パッハやシューマンを讀えるとして彼らの作風を模倣した曲、調性が揺れ動く無調的な曲、複雑なリズム構造を導入した曲など特徴的な曲も含まれている。第6巻は14曲あり、最後の第148曲から第153曲までが「ブルガリアのリズムによる6つの舞曲」。ハイチコ・ヨーハンに獻呈された。

●J.S.バッハ(平均律クラヴィニア曲集第2巻より) 第1番 プレリュード

バッハは1オクターヴにある12音すべての長調と短調を用い、第1巻、第2巻それぞれ24曲の前奏曲とフーガによる曲集を書いた。第1巻はケーテンの宫廷楽長を務めていた1722年頃までに書かれた、息子の教育目的に伝えられているが、第2巻はライプツィヒ市音楽監督及び聖トマス教会のカントル(教会音楽家)に就任した後の1740年代に纏められ、より高度な音楽的内容が含まれている。

第1番はハ長調、幕開けに相応しい莊重な前奏曲と3声のフーガで構成されている。

● J.S.バッハ(平野公端訳)／主よ、人の望みの喜びよ

原曲はカンタータ「心と口を行ひと生活で」もともとバッハがヴァイマルで1716年、降誕祭第四日曜日のために作曲しようとしたカンタータだったが、その後コラールを取り換え、聖母マリア御訪問の祝日のために改作された。その第6曲コラール合唱等を、「ピアノの女王」の称号を贈られたマイラ・ヘスがピアノのために編曲したものである。

● J.S.バッハ(平野公壽編)／G線上のアリア

バッハは「管弦楽組曲」を4曲遺した。各々はフランス風序曲形式を標榜し、また当時の華やかな舞曲や宮廷音楽を融合させた独自の境地を築いている。その第3番の第2曲「アリア」がこの作品の原曲。ドイツのヴァイオリニスト、アウグスト・ヴィルヘルミがこのメロディーをヴァイオリンのG線だけで演奏するように編曲し、広く親しまれるようになった。

● LS / バッハ(平野公義編) ゴルトベルク変奏曲より 第16変奏、第26変奏、即興、第19変奏、第7変奏、第30変奏、アリア

バッハの庇護者であったカイザーリンク伯爵の不眠症を慰めるために創作したというエピソードには、今日疑問符が付いている。けれどもゴルトベルクとは伯爵に仕えるピアニストであり、伯爵がこよなくこの作品を愛したことは事実。アリアと30の変奏曲、そして回帰するアリアで構成されており、全曲にはバッハらしい数学的な配慮と対称性が施され、後半トップの第16変奏はフランス風序曲で華やかに開始される。他のバッハ作品も同様だが、平野及びブルーオーロラの取り組みは単なるトランスクリプションやバラフレーズでは決してない。バッハの時代にはなかった楽器を用い、演奏本來の即興的な要素を現代に蘇らせた新しいバッハ像の創造である。